東京発

東神田通信

前田 龍雲

以前から囁かれていた（？）東京都千代田区東神田にある書道芸術院の事務所入りがいよいよ現実のものとなった。正式には四月一日からなのだが、引き継ぎ準備などで今年に入ってしょっちゅう東京大阪間を行き来している。慌ただしい日々が過ぎ、あっという間にもう春の気配である。

◇新春の東京、特に銀座は今年に入ってからの玄遠をご覧になったとおり、書展が目白押しである。確かもう十年以上は経ったかと思うこの書道界恒例行事は、自宅でゆっくりする暇が無くなったとぼやく諸氏もおられるが、元日から営業を開始する店舗があるのだからこれも時代か…歯車の回転が速い。

しかし、書に限らずいつでも「いいもん」が見られるのも関東である。大阪はどうしたことか…もっと頑張らねば！

◇写真は毎日書道展新春展、和光の正面ディスプレイである。毎年様々な趣向が凝らされ、楽しみにしているのは筆者だけではあるまい。セントラル美術館では一〇〇人による選抜展、松坂屋カトレヤサロンではチャリティー展が開催。勿論、我が玄遠社の竹扇会もこの時期に書展を開催されているのは周知の通り。

和光ディスプレイ

◇後日、上野の森美術館に足を運び、「書貌と風貌『野口白汀の字』」展を見、迫力の作品群に圧倒されて帰ってきた。野口白汀先生は毎日書道会理事・東京書道会理事長。二〇〇七年に逝去された。

『野口白汀の字』展

◇一月三十一日～二月六日にかけて、第四十三回現代女流書一〇〇人展が日本橋髙島屋で開催され、玄遠社関係では髙田春来・小伏小扇・萩原香扇・水野春翠先生が、墨の競演をされた。

◇二月七～十二日は第六十五回記念書道芸術院展中央展が開催。十一日は帝国ホテルで作品鑑賞会・物故者慰霊祭が厳粛に行われ、その後約六百名が出席した祝賀会と目白押しの一日であった。受賞者・役員（無鑑査以上）の方は是非ご参加を！

表彰式

◇三月に入り、院事務局長千葉蒼玄先生と季節外れな雪の中を成田空港に向かう。パリへ発ったのだ。パリでは連日快晴。暖かく穏やかな日差しに春を感じる。高速道路の脇には水仙の花があり、丁度見頃であった。パリのギメ美術館で毎日現代書ギメ展が開催。十三日にはパリ市警音楽隊と書のコラボレーションで千葉蒼玄・下谷洋子先生と前田龍雲がパリジャン・パリジェンヌを前に揮毫した。空いた時間にオルセー美術館・オランジュリー美術館を見学。刺激を受けて帰ってきた。十五日には、またこの三人で別の会場で揮毫をし、現代書と伝統書の広報に努めた。

揮毫風景

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇三月も末、二十四日から二十八日まで、書道芸術院展東日本展が行われた。昨年は千年に一度といわれる大震災に見舞われ、作品が多数津波に飲み込まれるという被害に遭い、中止を余儀なくされた東日本展であったが、本年は幾多の苦難を乗り越えて、無事開催された。陳列点数は二千を超え、会場となったせんだいメディアテークは熱気に包まれた。

勝山館での祝賀懇親会

会場の制約があり、さぞや陳列は苦労されたと拝察する。

二十五日、昼に祝賀懇親会。これも三百八十名ほどの出席者で盛り上がり、書道芸術院の結束を固めた。

◇祝賀会後、恩地春洋・田村鄭雲先生と共に千葉蒼玄先生・出羽表具店さんのご案内で一路石巻へ向かった。画面でしか見たことのなかった光景が現実のものとして飛び込んでくる。絶句。本当に言葉が出なかった。阪神淡路大震災を少し経験したものでさえ…。

基礎だけになった家屋とうずたかく積まれた がれき（南三陸町）

◇翌二十六日は、気仙沼を視察。のち、被災された小野寺逢仙先生を表敬訪問した。

小野寺逢仙先生ご夫妻を中心に

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇初夏を思わせる陽気だった四月二十四日、横浜市民ギャラリーで開催されていた第五十二回書燈社展に辻元大雲・千葉蒼玄・三浦鄭街先生とともに四人で伺った。

書燈社とは、昭和二十一年に青木香流先生により設立された。現在、船本芳雲前理事長・百瀬大蕪理事長を中心に、横浜に拠点をもち、現代書・近代詩文書を中心に研究・発表されている団体である。

今回展は、スタンダードの作品サイズがなんと六×六尺！ここでの大作と呼べるものはこの倍以上の大きさの作品であろうか。勿論大きいことだけでは驚かない。よく吟味された素材と鍛錬された技術があってのことである。またまた自分の不勉強さを恥じる一日であった。

船本芳雲先生の作品（正面奥）

◇五月十三日には上野精養軒において財団法人書道芸術院の会議が行われた。

午前は評議員会、午後は理事会である。厳粛な雰囲気の中、昨年度の事業報告、会計報告、今年度の事業計画、予算案などが話された。当たり前だが、宴会で緩んでおられる先生方の顔はここにない。真摯に書道会（界）の運営、作品についての協議がなされている。滞りなく午後三時頃に終了。後に、二年間の大改修を終えた東京都美術館を見学。バリアフリーになった正面玄関やミュージアムショップ、レストラン、講堂などの設備も充実。来年の第六十六回書道芸術院展はここで開催される。

評議員会で挨拶をされる辻元理事長

東京発

東神田通信

前田　龍雲

◇五月の大きな仕事はなんと言っても書道芸術院をあげて参加している第六十四回毎日書道展の公募作品搬入・整理そして鑑別である。本年は書道芸術院から昨年比三百数点増で関係者は一安心である。

搬入は千代田区一ツ橋にある毎日新聞東京本社地下の毎日ホールで、部別に受け付ける。数年前から未表装の鑑別になり、作品の取り扱いはより一層慎重さが要求される。さすがに三万点を超える日本最大の展覧会とあって、広い会場が人と作品で埋まる。整理を終えた作品は新国立美術館に搬入され、二十五日からの鑑別に備える。

鑑別は写真のように、かくも厳正に行われる。挙手により点数がきまる。審査員の先生方の眼はよりよい作品を取り上げようと輝いていた。惜しまれるのは大字書部当番審査員の萩原香扇先生がこの仕事を待たずして他界されたことである。

鑑別の様子　（一番右は点数確認をする審査部飯田春香先生）

大字書部当番審査員（前列一番手前が書道芸術院の依岡紫峰先生）

来月の入賞審査もどこかで見守っていただけるであろう。

◇六月五日、書道芸術院事務所において、第六十六回書道芸術院展運営委員会および実行委員会が開催された。今回展から大改装を終えた東京都美術館に開催場所が戻り、全国学生書道展が併催され、変革の年である。それに伴い綿密な打ち合わせがされた。玄遠社関係は小伏小扇先生が祝賀会部長である。来年二月十六日の祝賀会を大いに盛り上げようではないか。

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇六月五日～十日、書道芸術院理事長・辻元大雲先生他、院関係多数の方々が出品されている日本詩文書作家協会展が東京セントラル美術館で開催された。各会派の作家が、しかも公募展などでは他の部門に所属されている先生方が詩文書作品を発表。違った側面が見られて新たな発見がある。特別展示は「日中文化人の書」として各界の著名人の書も陳列された。

七日に院事務局次長の三浦鄭街先生と伺い、その夜は高野山競書大会で二十年ほどお世話になっている日本詩文書作家協会の事務局長・宮本博先生や事務局の方々と楽しい一時を過ごした。お付き合いの幅が広がるのも楽しみの一つである。

◇六月十二日は大阪を通り越して高知県は安芸市へ。現在恩地春洋会長が審査長を務める第三十回記念安芸全国書展を訪ねた。これもいわゆる他流試合。審査は広い視野を求められるものであろう。これからどういう方向、傾向になっていくのか楽しみに見ていきたい。高知でお世話いただく方々に細かいところまでお気遣いいただき感謝に堪えない。

◇六月末は第六十四回毎日書道展の入賞審査である。当番審査員の作品を見る眼は、先月の鑑別とは違いより一層厳しいものとなる。特に誤字については厳しく（前衛書部はもちろん除く）、怪しいものは除外される。数々の難関を乗り越えた本年の玄遠社関係毎日賞は菊池昌春・岡村恵窓・細田清苑さんの三名である。勿論関西展（京都市美術館）でも陳列されるが、会場が変わると同じ作品でも見え方が違う。時間をみつけて是非体感していただきたい。

中心は毎日賞受賞者名を読み上げる大字書部審査部の小伏小扇先生

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇7月に入り書道芸術院関係者が出品する展覧会が目白押しであった。書泉会展・玉松会展・春洋会展・水野春翠書展・みちのくの書人たち展・豊峰会展・楽竹の会展そして毎日書道展… 事務所から比較的短時間で行ける場所の展覧会をざっとあげただけでもこれだけある。他を列挙するとキリがないほどだ。

◇玉松会は玄遠誌にかなの玉作玉稿をお寄せいただいている石井明子先生が所属されておられる。今年で10回をむかえられ、得も言われぬ落ち着きと華やぎを感じる。春洋会書展・水野春翠書展の報告は他の項に。

玉松会展

本年度毎日賞受賞者（院関係）

◇毎日書道展における本年の書道芸術院関係受賞者数は、会員賞1、毎日賞14、秀作賞33、佳作賞60、U23毎日賞1、U23新鋭賞2、U23奨励賞5の成績であった。

例年毎日書道展の祝賀会（本年は7月22日）後、書道芸術院主催の祝賀会がある。その運営も事務局の重要な仕事の一つである。毎日展出品者名簿・受賞者名簿などに基づき参加者を募ったり場所を探したり下見をしたりと結構仕事があるものだ。当日は司会進行の大役を仰せつかった。皆さんの笑顔を見届けて最後に会場を出た。

東京発

東神田通信

前田　龍雲

◇八月、書道芸術院あげての大きな行事は、なんと言っても単位認定講習会である。本年で四十八回を数え、今回は山陰支局（名越蒼竹支局長）が担当である。十八・十九日に行われ、鳥取県は羽合温泉、昭和六年に開業した老舗旅館「望湖楼」と近隣の会館「北栄町北条農村環境改善センター」をお借りしての講習であった。

書道芸術院は各部門を有する団体で、相互理解の為に毎年行われる。また、この講習会を受講していないことには書道芸術院審査会員の資格は得られないのだ。漢字・かな・現代詩文・篆刻刻字（本年は篆刻）・前衛・原拓書道史・書道芸術院史、そして本年から新しく書写教育の講義が加わり、充実した内容であった。毎年講師も代わり内容も新鮮。先生方の席上揮毫を見て目から鱗状態の受講生の姿も見受けられる。

来年は熱海で行われる予定だ。作品制作の幅が間違いなく広がるので玄遠に関わりのある皆さんも是非受講していただきたい。

講習会の運営自体は各総局支局に任されている。毎年各地区で数十名もの方々にお世話いただき成り立っている。有り難いことだ。事務局のお手伝いとしては、講師の先生方からお預かりした資料原稿を受講生の人数分印刷することくらいだ。といってもページ数がたくさんあり、一人ですったもんだしながら夜中までかかったが…多分昨年は千葉蒼玄事務局長にお世話いただいたのであろう。

前衛書講師津田海仙先生の揮毫風景

◇十月二日～七日まで書道芸術院秋季展が東京セントラル美術館で催されるのだが、八月二十八日に、審査会員候補の公募作品審査が東京文具会館で行われた。本年の応募点数は三百十四点。この中から、厳正な審査の上、秋季菊花賞一〇点。入選四十一点が選ばれた。玄遠社関係は奥藤春葉さんが菊花賞を受賞。関係者の名前があると素直に嬉しい。十月二日、秋季展初日に表彰される。

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇九月四〜九日まで、大阪市立美術館において玄遠社書展・書道芸術院展役員作品巡回展・日韓書芸二人展・日韓交流書展が行われた。盛りだくさんの企画で見応えのある書展で僭越ながら大阪もやはり捨てたモンじゃないなと再認識した。東京であろうが大阪であろうがいいものはいい。巡回展の作品もゆったりと陳列されて作品の表情が生き生きしていた。

◇九月十三〜十九日まで横浜の赤レンガ倉庫で、前衛書作家有志の展覧会「The Sho あしたを書く」があり、初日に伺った。勿論可読性のものもあるが、ここは今までの「書」の概念を捨てて鑑賞しなければならない。立体あり、楽器のように音の出るものあり、様々な「書」の可能性を模索されている姿が伺えた。

赤レンガ倉庫にて

◇九月十九〜二十三日まで、名古屋の電気文化会館で「加藤大碩の世界展・加藤裕個展」が開催された。加藤大碩先生は名古屋市生まれ。金子鴎亭に師事。書玄会を創立。毎日書道会参事、創玄書道会常務理事、日展審査員などを歴任。二〇〇九年、八十四歳で逝去された。高野山競書大会の審査でお世話になった先生だ。日展に出品された作品が物議を醸し出し大変であったエピソードも会場でお聞きすることができた。新しいことをしようとするといつの時代も壁があるものだ。

加藤大碩の世界展にて

加藤裕先生は先生のご子息で父上とはまた違ったアプローチで迫力のある作品群が圧巻の大個展であった。

◇しかし東京に来てからというもの、慌ただしく時が過ぎ去っていく。半年ほどになるが何も残っていないような… 三月末に三人の方が退職され、私一人入っただけなのでそろそろ影響が出始めているかもしれないが、何はともあれ目の前のことをこなしていくより他はないと思う今日この頃だ。体調には気をつけなければ。

東京発

東神田通信

前田 龍雲

◇十月一日は書道芸術院秋季展の陳列である。東京セントラル美術館では朝から行われ、推薦作家展開催場所の毎日アートサロンでは午後から。セントラル会場の陳列計画は本年から私が担当。なかなか陳列から外れない…。夕刻から推薦作家展の会場でオープニングパーティーが行われ、それぞれの作家が制作意図を述べた。作品に対する思いが違ったかたちで訴えかけてくる。理論的な考えも必要だ。

制作意図を述べる奥藤春葉さん

翌日はセントラルで表彰式、研究会、祝賀会と目白押し。多数の来場者があり、主催者側としては一安心である。

難関を突破した秋季菊花賞の受賞者は喜びと緊張の一瞬であっただろう。

◇秋季展と同時期に書道芸術院展役員作品巡回展（併催東京総局展）・馨香会展・書泉会展がそれぞれ開催され、館内は書道芸術院一色である。馨香会は香川倫子先生率いる前衛書・刻字中心の会。本年で三十回を迎えられた。書泉会は下谷洋子先生率いるかな書中心の会である。下谷東雲先生の遺墨が特別展示された。

◇十月八日は、事務局次長の三浦鄭街先生主宰の会で前衛書講習会が行われた。場所は千葉県八街市。初めて降り立つ地であった。講師は千葉蒼玄先生で、私は講義のアシスタントを務めた。初心者にも分り易い解説で、ますます前衛書ファンが増えそうだ。

◇十月九日は、事務所で第六十六回書道芸術院展作品募集規定の発送作業を行った。個人宛のものは業者に委託しているが、団体向けは事務所で行う。東日本大震災で院としては厳しい状況であるが、なんとか出品数を維持したいものである。

発送作業風景